

「解体新書」扉絵を画かせた人物をめぐって

板野 俊文

香川大学

『解体新書』の中で、本来の原文訳以外に、「翼按ズルニ……」で始まるような解説文を加筆文という（大城孟著『解体新書の謎』）。これを解析することでどのように本書が作られていったかを知ることが出来る。

『解体新書』の中で「翼按ずるに……」という記述が十数か所出てくる。それらは、短いもの（13か所）や長いもの（2か所）と、無名のもの（1か所）等に分類される。今回の解析は短いものについて行った。

凡例の部分に「図を取る所の書目」の原典が記載されている。

- 木 ^{トニミユス}東米私解体書（官医桂川法眼蔵する所）
 火 ^{ブラシカール}武蘭加兒解体書（同）
 土 ^{カスバル}加私巴兒解体書（翼蔵する所）
 金 ^{アンブル}解体書（同 羅甸語を以て記す）
 水 ^{カスバル}安武兒解体書（中津侍医前野良沢蔵する所）

この中で「金」「土」は別の図が用いられている。また、「説を取る所の書目」を引用した原典は以下である。同前。

- ^{カスバル}加私巴兒解体書（官医桂川法眼蔵する所 羅甸語を以て記す）
^{ヘスリンキース}昔私林牛私解体書（官医山脇法眼蔵する所）
^{ブラシカール}武蘭加兒解体書（中津侍医前野良沢蔵する所）
^{バルヘイン}巴爾靴員解体書（我が藩医中川淳庵蔵する所）
^{バルシトス}拔爾詩都私解体書（同）
^{ミステル}米私計爾解体書（処土石川常蔵蔵する所、^{アルメニア}亞爾馬泥亞国の書）

1, 4, 5の原典は不明または当時としては判読不能。加筆文に登場する一部を引用する。

「翼按ずるに、^{ブラシカール}武蘭加兒曰く、門脈は、脾腸及び下隔膜等より生ずる所の血を受く（後略）」

^{ブラシカール}武蘭加兒は最も多く5回引用されており、オランダ人の Steven Blankart（1650-1702）である。

「翼按ずるに、曰く、この管は長くして頭蓋の直縫に循ひ、鼻上に至る。故にこれを傷つくれば、即ち血、鼻中より出づ。呼んで血脈と曰ふ。」

^{カスバル}加私巴兒は4回引用されているが、デンマーク人の Caspar Bartholin（1585-1629）でその孫はバルトリン腺でその名を現代でも残している。

「翼按ずるに、^{ヨンスタン}用須丹私の禽獸譜に曰く、^{ハーネン}呀念は^{インド}印度に産す。肉冠長尾、背に五彩文を備へ、腹に黑白斑あり。^{ヨンスタン}黄項黄嘴、而してその距、利なり。」

「翼按ずるに、^{ヨンスタン}用須丹私の魚譜に曰く、^{ミルトボト}太爾勃都は所在これあり。地中海に産する者、甚だ大なり。その形、方にして斜、下顎に麦あり。長さ四、五尺の者、径り二、三尺。厚さ足の大指より跟に至るの一度の如し。（後略）」

^{ヨンスタン}用須丹私は2回引用されているが、スコットランドを出自とするポーランドの博物学者 Jan Johnston（1603-75）である。ところが、「図や説を取る所の書目」に記載がない。

「ここに梨と翻す。^{ドドネウス}翼、^{ドドネウス}度度奴私の草木状を按ずるに、その形長し。吾が邦の産する所の者と異なり」
 「^{ドドネウス}（翼、^{ドドネウス}度度奴私の草木状を按ずるに曰く、^{ミルトボト}米總都河武は二種あり。共に木に似て木に非ず。草に似て草に非ず。好く寒国の薬圃に長ず。（後略）」

^{ドドネウス}度度奴私も2回引用されているが、レンベルト・ドドエンス Rembert Dodoens（1517-1585）、日本ではドドネウスで知られている。これも同前で出典の記載がない。現在、ヨンスタンとドドエンスの原典の所在について検討を行っている。